

「とことん語る”福島事故と原子力の明日”の第6章の取り纏めにあたって」

中神靖雄

今日は2012年12月31日。

「とことん語る”福島事故と原子力の明日”の第6章「日本のエネルギーはどこへ向かう？」の取り纏め者の中神靖雄です。

第6章を紹介する記事を寄稿する約束になっていたのが今日になってしまいました。

2010年に行ったシニアと学生の往復書簡を、一般向けに編集して日本電気協会新聞部から発行する寸前に3・11事故が起き、全てが白紙となりました。

その後の学生の関心や対話も内容が大きく変わりました。

「福島原発事故のような事が何故起きたのか」「原子力の安全は確保出来るのか」「原子力推進体制に根本原因があったのでは？」「規制はどうあるべきだったのか」

「原子力発電事業は民間企業でよいのか」「日本の将来のエネルギーは脱原発で火力発電や自然エネルギーに変わるのか」「日本の企業はどうなるのか」

等々、学生の心配や不安は切実なものでした。

エネルギー政策に関するシニア側の回答者は、メーカー、外交官、電力会社、商社、研究機関出身で、それぞれを代表する識見の持ち主達であり、内容の濃い議論だったと思います。

3.11事故後の約10ヶ月のやりとりを纏めたのが本書ですが、第6章だけでも往復書簡は12万字を超えるものでした。

一般向けには、これを分かりやすく5分の1以下に圧縮する必要がありました。

電気新聞の編集担当の新保さんとも相談しつつ、シニアと学生の対話・往復書簡の持つ新鮮さを失わないように編集した結果が、この第6章です。

エネルギー・原子力を巡る環境は現在も著しく変化しつつありますが、出版してから7ヶ月後に読み返してみても、十分新鮮です。

2011年の時点で「市民の多くが”原子力発電を支持しない”に傾いている。事故の影響が収束しない現状ではやむをえないが、-----」と記述しました。

今回の12月の総選挙では、「脱原発」を旗印にした政党は伸びず、国民の多くは「脱原発だけでは日本は立ちゆかない」と判断したのだと思います。

安倍総理のもと自民党政権では、国力が衰えない、国民生活が安定する方向に向けてのエネルギー/原子力政策が採られるものと期待しています。

2013年12月31日 23時 中神靖雄